

経済マンスリー

[原油]

原油市場を取り巻く環境(6月)

1. 原油価格の推移

原油価格(WTI期近物1バレル当たり)は、ワクチン普及の進展を受け景気回復が本格化するとの期待から上昇基調で推移している。6月半ばには米連邦公開市場委員会(FOMC)の利上げ予想を受けた米株式相場下落により原油価格は下押されたが、その後、米エネルギー情報局(EIA)の統計で原油在庫が5週連続で減少したことなどから、堅調な需要が好感され再び上昇基調となり、足元は70ドル台前半で推移している(第1図・上)。

2. 需給の動向

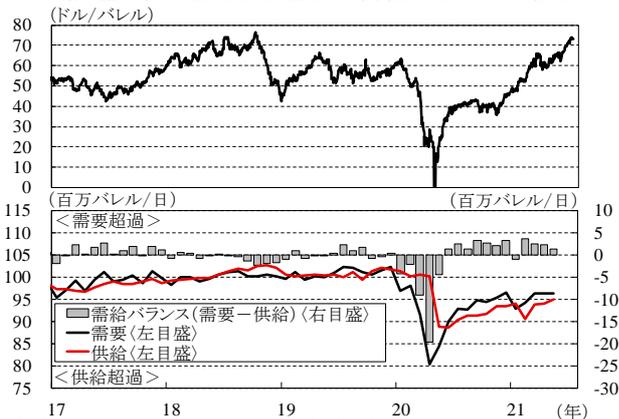
EIAの月報によると、5月の世界の原油需要量は日量9,622万バレル、供給量は同9,502万バレルと需要超過は続いたが、超過幅は縮小した(第1図・下)。

こうした中、原油市場では供給面に関連しイランの動向に注目が集まっている。6月、同国では事前の予想通り保守派のライシ氏が大統領選挙に当選したが、ロウハニ現政権は新しい保守派政権下での米国との核合意交渉決裂を危惧し、選挙前から核合意復活に向け交渉を急ぎ最終調整の域まで進展したとされる。米国はテロ行為や人権に関する制裁対象の解除に慎重であり未だ合意には至っていないが、ハメネイ最高指導者も米国バイデン政権の外交チームも先の核合意の立役者であることから今回の合意には強く拘っていると考えられ、保守派ライシ政権下といえども交渉は容易には決裂しないと考えられる。

但し、同国が「交渉妥結」「制裁解除」により原油市場に復帰しても、原油価格を大きく下押しするかは不透明である。まず、イラン要人が語る原油供給量^(注)は過去実績に照らし実現可能性に乏しく、原油相場に強い影響を与える程の供給増は見込み難い(第2図)。また、直近の交渉の報道等により、「交渉妥結」は既に今の価格へある程度織り込まれているとも考えられる。イラン核合意交渉は中東の地政学的情勢を左右し得るものだが、原油市場としては蓋然性の高い「交渉妥結」より、寧ろ「交渉決裂」の方に警戒を要するといえよう。

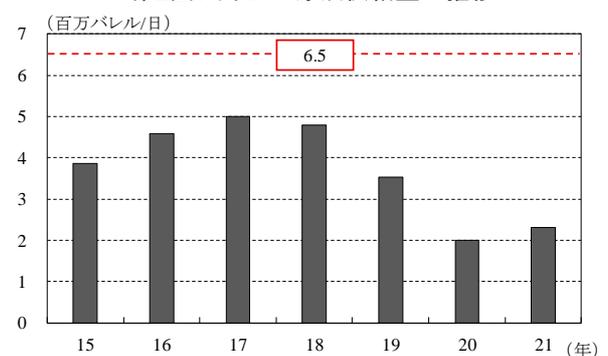
(注)例えば、ザンギャネ石油相は、同国の原油供給量は日量6.5百万バレルまで引き上げ可能と発言している。

第1図:原油価格及び世界の需給バランスの推移



(資料)EIA、Bloombergより三菱UFJ銀行経済調査室作成

第2図:イランの原油供給量の推移



(注)21年は5月までの平均
(資料)BP Statistical Review of World Energy 2020、
IEA(国際エネルギー機関)より三菱UFJ銀行経済調査室作成

照会先：三菱 UFJ 銀行 経済調査室 布施 直樹 naoki_fuse@mufg.jp
鷹巣 里奈 rina_takasu@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当行はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。